

古代エジプトの植物と庭園

内 田 杉 彦

明倫短期大学 歯科衛生士学科

Flora and Garden in Ancient Egypt

Sugihiko Uchida

Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

キーワード：古代エジプト，植物，庭園，樹木，花

Keywords: Ancient Egypt, Flora, Garden, Tree, Flower

1. はじめに

現在のエジプトの国土は、その約95%が不毛の砂漠とはいえ、国民の大多数はナイル流域を中心とする緑地で暮らしており、生活圏としてのエジプトは緑豊かな国と言える。古代エジプトの人々にとっては、このナイル流域平野こそが「祖国」であり、しかも当時の気候は比較的湿潤で、現在の砂漠に当たるところにはサヴァンナのような草原が広がり樹木が点在していた。古代のエジプトは、現在のエジプト以上に「緑の地」だったと言えるだろう。古代エジプト人の来世もまた「緑の地」であり、彼らの死後の楽園、「イアルの野」には、水路の岸に育つ樹木や花々がみられる。

2. パピルスと睡蓮（「ロータス」）、花

ナイルと水路は現在もエジプトの景観の特徴となっているが、古代には流域平野全体に水路網が張り巡らされ、湿地帯や溜め池が各地に見られた。このような水場の周囲にはイグサや葦、スゲ、パピルス、ダンチクといった水草が数多く生えており、古くから籠や筵、縄などの材料として利用されていた。これらの水草のうち代表的なものと言えるのはパピルス（カミガヤツリ）である。この水草は、古くから川舟や筵、籠やサンダルなどの材料とされたが、そのうち最も重要な用途は、筆記用の「紙」の原料

とされたことであろう¹⁾。パピルスの茎の髄を交互に重ね、圧迫・乾燥させて作られたこの「紙」（パピルス紙）は、イグサで作られた筆とともに、行政や経済、宗教、文学など様々な分野の文書の筆記に用いられた。

パピルスはまた豊穡と生命、再生の象徴であり、護符や装身具、鏡などの意匠に用いられたほか、葬儀には、死者の再生を促すためにパピルスの茎を持つ人々が参列した¹⁾。パピルスの茂みはまた、墓地を守護するハトホル女神が出現する場所とされ、葬祭文書「死者の書」には、墓地のある岩山からパピルスの茂みへと雌牛の姿のハトホルが出現する姿が描かれている^{2,3)}。

パピルスとともにエジプトの水生植物を代表するものが、一般に「ロータス」と呼ばれる睡蓮である。この花には青睡蓮と白睡蓮の2種類があり、ともに神々や死者への供物とされた。特に重視されたのは青味を帯びた花卉と芳香を特徴とする青睡蓮であり、夜明けの直後に開花し、午前半ばに花を閉じるという性質を持っていた^{1,4)}。

この青睡蓮の夜明けの開花は、太陽神の誕生・再生、来世信仰と結び付けられた^{1,4)}。原初の海ヌンから生じ、その後もヌンからの再生を繰り返しているとされた太陽神は、ヌンの水面に浮かぶ青睡蓮の開花とともにそこから誕生・再生するとされたのである。青睡蓮は太陽神の再生（太陽の運行）がもた

らす永遠の時の流れに結びついた神、ネフェルテムとして崇拜され、この神は生まれたばかりの若い太陽神と同一視されるようになった。

青睡蓮はまた、死者がネフェルテムや太陽神のように、来世に再生する姿のひとつともみなされており、青睡蓮の芳香は太陽神や死者に活力を与え、その再生を促すとされていた^{1,4)}。当時の墓壁画には、墓主が青睡蓮の花を手にして香りを楽しむ姿が描かれるが、これはおそらく死後の再生を象徴するものであるだけでなく、当時の上流階級の習慣でもあったのだろう。睡蓮の花と根には、麻薬作用を持つアルカロイドが含まれており、睡蓮を浸したワインが宴席で飲まれていた可能性がある⁴⁾。青睡蓮の芳香と麻薬効果による快感が、この花の持つ生命力のあらわれと感じられていたのかもしれない。

睡蓮はパピルスとともに神殿の装飾要素にも用いられ、それをかたどった「ロータス柱」と「パピルス柱」は、エジプト神殿建築の特徴をなしている^{1,2)}。神殿は、創世の際にヌンから浮上した最初の陸地「原初の丘」とその周囲の湿地になぞらえて作られていた。入口から「原初の丘」を象徴する内陣に至るまでの区画はこの湿地を表しており、そこにパピルスと睡蓮をかたどった柱が林立する多柱室や列柱廊が作られたのである⁵⁾。

一般に、パピルスが北部のデルタ地帯（下エジプト）の象徴とされるのに対して、南部の上エジプトを象徴する植物は睡蓮（「ロータス」）とされ、それらが結び合わされた図像が国土統合の象徴としてしばしば説明される^{1,4)}。しかし上エジプトの象徴とされるこの植物は、墓壁画の宴会場面などに描かれる睡蓮とは似ておらず、睡蓮であるかどうかは疑わしい。この植物については、パピルスと同じ水草であるスゲの花とする説があり、開花したスゲを表すエジプト文字が「上エジプト」を意味することからも、これは有力な解釈と思われる⁶⁾。

古代のエジプトには睡蓮以外にもキクやスイセン、カミツレなど外来種の花が自生しており、王国の領土がナイル河谷の外に拡大した新王国時代には、西アジアからヒナゲシ、ヤグルマギク、ユリ、ベニバナ、マンダレイクなど、ローマ支配時代にはバラやジャスミンなどが移入された⁷⁾。これらの花は王宮や貴族の邸宅、神殿の庭園に植えられ、それを材料とした花束や花輪、花飾りが神々や死者への供物や、祝宴に招かれた人々への贈物とされた⁷⁾。特に祭礼には大量の花が使われ、第20王朝のラメセ

ス3世の治世には、1057日間にわたって行われた国家神アムンの祭礼のため、436万7684点もの花束や花飾りが捧げられたことが記録されている⁸⁾。

新王国時代の王墓地「王家の谷」では、第18王朝トットアンクアムン王の葬送の宴に用いられ、あるいはこの王の棺を飾っていた花襟飾りや花輪が発見されている^{7,9)}。これらの花飾りは、パピルスの台紙にヤグルマギクや青睡蓮などの花、オリーブやヤナギの枝、アカテツ科の常緑樹ベルセアの葉、ザクロの実などの植物素材とファイアンスのビーズを取り付けて作られていた。

この王墓やいくつかの貴族墓からは、葦の茎にベルセアとオリーブの葉を結びつけた簡素な「花束」も発見されている⁷⁾。これらは墓前の儀式に使われたものだろうが、当時の墓壁画に描かれている花束は、もっと華やかであり、パピルスの茎にヤグルマギクや睡蓮などの花や葉、ザクロやマンダレイクなどの果実を付けたものだったとみられる⁷⁾。このような花束を意味する単語は、「生命」を意味する単語と綴りや発音が共通する「アंक」であり、それを神や死者に捧げることは、植物の生命力を供給するという意味を持っていたと思われる^{2,7)}。

3. 樹木

古代のエジプトには、大きな材木が切りだせる針葉樹が自生しておらず、神殿の塔門に建てられた高さ60m以上とみられる旗竿や、大きな舟、継ぎ目の少ない木棺を作るには、西アジア産の針葉樹材が利用された。また、内陸アフリカからは香木や（誤って「黒檀」と呼ばれている）アフリカンブラックウッドなどが輸入されている。

しかし、エジプトは決して樹木そのものに乏しい国ではなく、農耕地に沿った土手には様々な木が自生しており、木陰に咲く花とともに庭園に植えられていた。エジプトの樹木は、それぞれの特質を生かした用途に古くから利用され、果樹は貴重な食料源となった。また、強烈な日光に晒される昼間には、大木の作る木陰は、今も昔も変わらず人々の憩いの場となっている。

エジプトに自生する樹木のなかでも最も重視されていたのはシコモア（シコモアイチジク）であろう。成長すれば大木となり、大きく枝を広げるこの樹木は、とくに涼しい木陰を作るだけでなく、甘い果実が食用とされた。シコモアの古代エジプト語名（ネヘト）は「避難所」を意味する単語でもあり、当時



図1 シコモア(中部エジプト)(アコリス遺跡調査団提供)

の人々がこの樹木に対していかに愛着を覚えていたかをうかがわせる。柔らかくて加工しやすいシコモア材は日用品や彫像の材料に使われたほか、木片を継ぎ合わせて棺を作るのにしばしば用いられた。この樹木の乳液状の樹液も特徴のひとつで、果実や葉とともに火傷や腫物などの治療に利用された。

古王国や中王国時代の貴族の墓銘には、自分の墓のために広大な池を掘削し、周囲に数多くのシコモアを植えたことを誇るものがみられる。これはナイルの氾濫が及ばない乾燥地に庭園を作り、地下水面に達する池を掘ったことを意味する。乾燥地の植樹にはそのための縦穴を掘って泥で満たし、絶えず水やりをする必要があった。大規模な造園が行われたとしてもそれは死後のためではなく、墓主の生活のためだっただろう。ただし、新王国時代のいくつかの墓では墓前にシコモアやナツメヤシを植えた痕跡が確認されており、葬祭文書「コフィン・テキスト」には墓前に「池を掘削し、シコモアを植えるための呪文」(呪文119)が含まれる。シコモアは貴重な財産として来世においても重視されていたと言えるだろう。

このことを最もよく示すのは、シコモアを、死者に水や飲食物を与える樹木の女神とする信仰である^{1,2,10,11}。「死者の書」の呪文、とくに「墓地で呼

吸し、水を思いのままにする呪文」(59章)や「水を飲み、炎で焼かれずにすむ呪文」(63A章)の挿画には、池のそばにうずくまる死者に、シコモアから出現した女神がパンや果実ののった皿を差し出し、壺から水を注ぐ姿が描かれる^{3,10,11}。この「シコモアの女神」は、新王国からギリシア・ローマ時代まで、墓壁画や墓碑などに数多く描かれており、その姿はシコモアの幹から上半身を出すというものから、食物の皿と水壺を持つ手だけの姿まで様々である^{1,2,10,11}。

この場面の死者の傍らには、鳥の身体に人間の頭部を持つ死者の「魂」、バァが、女神から水を注がれ、あるいはシコモアの根元で水を飲む姿がしばしば描かれる^{10,11}。バァは移動能力を持つ「人格」であり、昼間は鳥のようにどこへでも飛んで行き、現世に戻ることもできるとされた。バァが「シコモアの女神」から水を与えられるというイメージはおそらく鳥が水や果実を求めて樹木に集まることから来たもので、地上のシコモアも死者を助ける女神とされたことを暗示している。

この女神の名は記されないのが一般的だが、名が記される場合に最も広くみられるのは、天空の女神ヌトである¹⁰。ヌトは死後に再生を遂げたとされる来世の神オシリスの母であり、死者がオシリスと同じく来世に再生するのを助けると信じられていたのだろう。ヌトはまた、朝に太陽(太陽神)を生み、夜に飲み込むのを繰り返すことで、永遠の時の流れを作り出しているとされた。古代エジプトの棺の内部には手足を伸ばし大地の上に覆いかぶさるヌトの姿を描いたものが見られるが、これは、棺すなわちヌトの体内に入った死者もまた太陽と同じくヌトによって再生するという信仰の表れであろう¹⁰。新王国の貴族ケンアムンの墓銘には、シコモアの女神ヌトが、死者のため涼しい木陰や飲食物、自分の乳を与え、さらに死者を身ごもって生命を与えると記されている¹⁰。これはまさに死者を再生させ、養う母神ヌトを表現したもので、死者への授乳のイメージは、おそらくこの木の樹液が乳液状であることによるのだろう。夫であるオシリスの再生を助けたイシスや、墓地の守護神ハトホルなど、来世信仰に関わりを持つ女神たちも、シコモアの女神として描かれることがあった^{1,2,10}。木棺の材料としてシコモアがしばしば用いられた背景には、死者を守り再生させる女神に対する信仰もあったとみることができる。

乾燥に強いナツメヤシはエジプトに限らず中近東



図2 サッカラのナツメヤシ林 (進士 洋子マリアム提供)

全域で最も広く見られる樹木で、先王朝時代までにはエジプトに移入され、現在に至るまで果樹として盛んに栽培されている^{1,2,10}。ナツメヤシの果実(デーツ)は甘く栄養があり、乾燥させて保存食とされたほか、果実酒や甘味料の材料としても広く使われた。ナツメヤシの木は同じ根から複数の幹が生えるためにしばしば樹林となって、広く涼しい木陰を作る。ナツメヤシの葉は永続性の象徴とされ、枝は、文字や記録の神トトが、王の在位年数を示す刻み目をつけるものとされた¹⁰。

ナツメヤシはシコモアとともに、墓壁画で住居や墓の周囲に描かれるだけでなく、いくつかの墓の前庭に植樹の痕跡がみられる^{2,10}。これら2つの樹木は現世ばかりでなく来世においても重視されていたのであり、事実、新王国後期の墓浮彫には、ナツメヤシとシコモアが合体した「樹木の女神」の姿さえ描かれている¹⁰。これはエジプト人にとって身近な2つの樹木の最良の側面、涼しい木陰と甘い果実を合体させたものと言えるだろう。

外来種のナツメヤシに対して、ナイル流域原産のドームヤシはオアシスや上エジプト南部に自生し、硬くて大きな種子を包む果実の外皮と、種子に含ま

れる甘い液体が食用とされる^{1,2,10}。ドームヤシも乾燥には強く、乾燥地や砂漠では地下水表面に近いことを示す目印となっていた。テーベ西岸の砂漠に位置する「王家の谷」で王墓建設に従事した職人たちの墓壁画には、ドームヤシの根元に広がる池(おそらく地下水表面)に身をかがめて水を飲もうとする墓主の姿を描いたものがある¹⁰。この場面に添えられた墓銘には、ドームヤシを、豊穰の神であり砂漠の金鉱山の守護神でもあるミンと同一視し、その根元で水が飲めるようにと願った祈願文や、死者自身がドームヤシに化身して地下水を飲めるように願った呪文などが添えられている¹⁰。砂漠では命綱の水源を示すドームヤシは、過酷な環境で働く人々を守る神ミンの化身とされ、来世においても、死者が喉の乾きに苦しむことのないよう守る存在とされたのだろう。

来世信仰の中心をなすオシリス神の皮膚の色はしばしば黒や緑で表されており、この神がナイル流域の肥沃な黒い泥とそこで育つ植物の生命力を表わす神だったことがわかる。この神の墓やその周囲にはギョリュウ(タマリスク)が生えているとする伝承があり、「コフィン・テキスト」(呪文682)によれば、女神ヌトは、「ギョリュウの野」でオシリスを産んだとされる²。第11王朝のメンチュホテプ2世が造営した王墓と葬祭殿の参道両側には、かつてシコモアの並木とギョリュウの林があり、参道の北には聖樹としてシコモアの大木が植えられていた²。オシリスとして来世に復活する王のために、ヌトの化身であるシコモアと、この女神がオシリスを産む(再生させる)ギョリュウが、王墓の正面に配置されたのであろう。地下深く根を伸ばし、ナイルの氾濫による水没にも強いギョリュウは、おそらくこの強靱な生命力によって死者の再生と結び付けられたのかもしれない^{1,2,10}。ギョリュウは農具や武器、木炭などの材料とされたほか、樹皮からは皮なめしに用いるタンニンが得られた¹。

タンニンはアカシアの種子からも得られたが、アカシアはさらに材木が舟や家具、棺などの材料となり、その樹脂(アラビアゴム)は、顔料の結合剤や、ミイラを巻く包帯の接着剤などに利用された^{1,2}。アカシアの古代エジプト語名(シェンジェト)は、太陽の運行が示す「循環」を意味する語(シェン)と「永遠」を意味する語(ジェト)を組み合わせた語呂合わせと解釈されており、この樹木の太陽信仰との関わりがみてとれる¹²。



図3 アカシア(中部エジプト)(アコリス遺跡調査団提供)

新王国以降の神殿浮彫には、王に長い治世を授ける儀礼として、古代エジプト語でイシェドと呼ばれる樹木の傍らに王がひざまずき、神々がその王の名を、イシェドの葉や果実に記す場面がみられる¹¹⁾。この儀礼の中心地は太陽信仰の総本山ヘリオポリスであり、イシェドは太陽信仰と結びついた聖樹だったとみられる。夜間に冥界を旅するとされた太陽神(太陽)は、その夜の旅の間に、太陽神を飲み込もうと襲ってくる大蛇アペピと戦わねばならないとされていた。「死者の書」(17章)の挿画には、この戦いの表現として、猫の姿の太陽神がイシェドの木の前でアペピを切り刻む場面が描かれる^{11,13)}。このイシェドがどの木を指すかについては諸説があるが、ペルセアか、ハマビシ科のバラノスとみるのが一般的であり、想像上の樹木である可能性も否定できない^{1,2,10,11)}。

ペルセアは花飾りの材料となったほか、果実が火傷治療の軟膏に利用されており¹⁰⁾、バラノスの種子からは芳香のある油が抽出されていた²⁾。このほか、古代エジプト人の生活に関わりを持った樹木には、やはり油の原料とされたゴマ、トウゴマ、モリンガ(ワサビノキ科)、オリーブ、果実が食用とされたイチジクやザクロ、果樹としてだけでなく硬い枝や幹が木釘に使われたハマナツメ、ワインの原料とされたブドウなどがあげられる^{1,2,10)}。

4. 庭園

新王国の貴族の墓壁画には、長方形やT字形の池を中心とした庭園を描いたものがある。青睡蓮が浮かび魚や水鳥がいる池の周囲にはヤグルマガクやヒナゲシなどの花、ナツメヤシ、ドームヤシ、シコモアなどの樹木が並び、片隅には墓主に水や食物を与える「シコモアの女神」が描かれる^{1,2,10,11)}。このよ

うな庭園の場面は、死者が来世で必要とする水と食物の供給源と安息の場を、1本の木(樹木の女神)から庭園へと広げたものと言えるだろう。池は創世の原動力である原初の海ヌンを象徴するものでもあり、そこには死者の再生を促す青睡蓮の花が浮かぶ^{1,2,10)}。墓壁画に描かれた庭園は、死者が再生し、不自由なく暮らす環境を表したものと言えよう。

墓壁画にはまた、墓主の貴族が生前に所有していた庭園が描かれる場合がある。新王国初期の貴族イネニの墓壁画には、彼が所有していた果樹園と池が、穀物倉庫やシコモアの大木があるイネニの邸宅とともに描かれている^{1,2,10)}。この果樹園の場面には、植えられた樹木の名と本数を記した銘文が添えられており、それによると樹木はナツメヤシ(170本)、ドームヤシ(120本)、シコモア(73本)など20種470本以上に及ぶ¹⁰⁾。このような大規模な果樹園を所有することは特権階級の地位と富の証だったが、イネニがこの庭園図を墓に描かせたのは自らの権勢を誇示するためばかりではなかった。樹木のリストに添えられた銘文には、これらの樹木を眺め、シコモアの木陰で涼みたいというイネニの死後の願望が記されているのである¹⁰⁾。自らの庭園でくつろぐことが、当時の上流階級の人々の思い描いた理想の来世像のひとつであり、彼らが生前に好んでいた習慣でもあったのだろう。現世の庭園は死者のためのものでもあり、死者のバアがシコモアの女神のもとを訪れる場所だったのである。

庭園はまた、王や神々を祀る神殿にも設けられていた。第18王朝の女王ハトシェプストの葬祭殿には、神域入口両側にペルセアが植えられ、第一中庭に掘られた2つの池の周囲からは植樹のための縦穴の列が発見された²⁾。この縦穴には女王が(東アフリカ

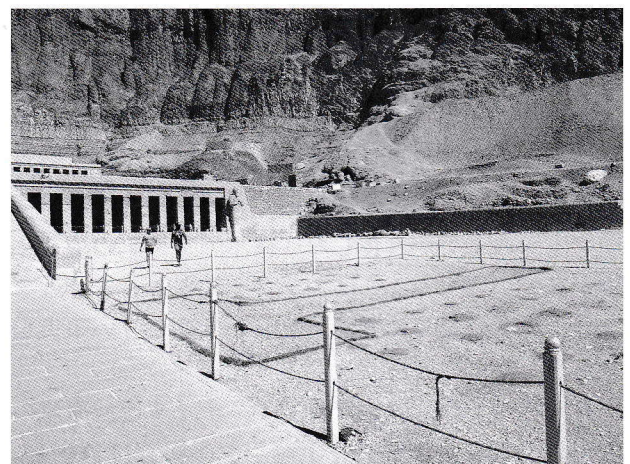


図4 ハトシェプスト女王葬祭殿の庭園跡

にあったとみられる) プントの国から輸入した香木が植えられたとされることがあるが、縦穴からは香木の痕跡は発見されていない²⁾。ただしハトシェプスト葬祭殿の浮彫には、鉢植えにされたプントの香木が描かれており、香木がこの葬祭殿の境内にそうした形で植えられていたことがうかがえる²⁾。

新王国の国王は、神々のために神殿を造営し、その内外に供物の供給源となる果樹園や花畑、菜園を設けたことをしばしば記録に残している^{2,14)}。国家神アムンの庭園の監督者だったセンネフェルの墓壁画にはそうした神殿庭園のひとつが描かれており、それによるとその中心にはブドウ園、周囲にはシコモア、ナツメヤシなどの並木や、睡蓮が浮かび水鳥のいる4つの池がある²⁾。

神殿庭園は、神殿建築と同じく「原初の丘」とその周囲の湿地を再現したのものであった^{2,14)}。庭園の池は太陽神が誕生・再生する原初の海(ヌン)、花や樹木は「原初の丘」に茂る植物をそれぞれ象徴し、神々に守られ自然の恵みに満ちた世界(エジプト)を象徴するものでもあった^{2,14)}。神官たちは日々の祭祀の前に、神殿の池で水浴をしたとされるが、これは「清め」であっただけでなく、ヌンに秘められた創生の原動力の幾らかを吸収し、祭祀を通して神々に活力を与えるためだったとみられる。神殿庭園は祭礼の場でもあり、カルナクのムト神殿やデンデラのハトホル神殿では、神像を乗せた舟を池に浮かべ、牽引する祭礼が行われていた²⁾。

神殿庭園の遺構は、ハトシェプスト葬祭殿やラメセス3世がメディネト・ハブに造営した葬祭殿などに残されており、規模や構造についてある程度知ることができる²⁾。また、太陽神アテンを国家神とする「アマルナ革命」を断行した第18王朝のアクエンアテン王の新都アマルナ(アケトアテン)は処女地に建設され、しかも「革命」の失敗により短期間で放棄されたために、神殿や王宮の庭園、個人庭園の遺構が比較的よく残されている^{2,15)}。

ナイル東岸の乾燥地に位置するこの新都の各所に井戸や池を掘削し植樹を行うのは大事業であり、緑に覆われた庭園が実際に出現するまではかなりの期間を要したと思われる。アマルナの王宮や神殿の遺構からは、水生植物の浮かぶ池や花咲く庭園を描いた壁画と床面タイルの断片が数多く発見されているが、こうした装飾はおそらく、実際の庭園の不備を補うものだったのであろう²⁾。

アマルナ中心市街の約3km北に位置する「北王

宮」には、中心に位置する池から王宮北東隅まで伸びた水路の先に、回廊に囲まれた庭園が作られていた^{2,15)}。庭園は回廊やその外側に並ぶ部屋より低く作られ、南側にはこの王宮の主である王女メリトアテンの居住区画に接するバルコニーがあって、王女がそこから庭園や回廊の眺めを楽しめるようになっていた。

アマルナにはまた、「日陰」と呼ばれる宗教施設がいくつか作られており、庭園がその中心をなしていた^{2,15)}。「日陰」のうち構造や規模が比較的良好なメリトアテンが所有したとみられるマルアテンは、アマルナ市街の約5km南に位置し、それぞれ周壁で囲まれた2つの区画からなっている^{2,15)}。南の区画には樹木が周囲に植えられた池があったが、北区画にはさらに広大な(120×60mの)楕円形の池があり、周囲には樹木が植えられ、花畑や菜園が作られていた。池の西岸には船着場、東岸にはアテンをまつる祠があり、おそらく国王一家が舟に乗って池や庭園の眺めを楽しみつつ祠を訪れ、祭祀を行っていたと思われる。アテンは地上に光を注ぐ太陽そのものであり、その光線が世界を創造し、動植物に生命を与えると信じられていた。アマルナはこの神の聖地でもあったが緑に乏しく、アテンが創造した恵み豊かな世界を現出させるために、そこには大規模な庭園が必要だったのかもしれない。「日陰」は王が家族とともにアテンの光の下で憩い、アテンもまた、自らの創造した世界を眺めて満足するところとされていたのだろう^{2,15)}。

アマルナの庭園は貴族の邸宅にも設けられており、そこにはアテンと国王一家を祀る祠が建てられていたが、長方形かT字形の池を中心に樹木や花を配置するその構成は、「アマルナ革命」前後の新王国時代の墓壁画に描かれた庭園のそれと共通している^{2,15)}。王や神を祀る祠も、墓壁画の庭園図に描かれる場合があり、上流階級の庭園の一般的特徴だったのかもしれない。アマルナでは古くからの神々の護符や神像が数多く発見されており、公式には「唯一神」とされていたアテンの礼拝とともに、旧来の信仰もまた存続していたことが明らかになっている¹⁵⁾。アマルナの貴族たちにとっても、庭園は、水と食物、木陰を与えてくれる女神が住み、死後の再生を促す睡蓮が咲くところだったのであろう。

5. 終わりに

水と緑に恵まれた国に暮らす人々にとって、古代

エジプトの庭園は素朴なものに思えるかもしれない。しかしエジプト人にとって植物は、彼らが神々に守られていることの証であり、庭園は彼らの世界を表す小宇宙であった。そして植物と庭園は、彼らが願ってやまなかった死後の復活・再生を支えるものでもあったのである。

文 献

- 1) Germer, R.: Flora. Redford, D. B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol.1. pp. 535-541, Oxford University Press, New York, 2001
- 2) Wilkinson, A.: The Garden in Ancient Egypt. The Rubicon Press, London, 1998
- 3) Faulkner, R. O.: The Ancient Egyptian Book of the Dead. Revised ed., pp. 67-70, pp. 186-187, British Museum Publications, London, 1985
- 4) Harer, W. B.: Lotus. Redford, D. B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol. 2. pp. 304-305, Oxford University Press, New York, 2001
- 5) ウィルキンソン, リチャード・H. (訳: 内田杉彦) : 古代エジプト神殿大百科, pp. 65-79, 東洋書林, 2002年
- 6) Fischer, H. G. : Ancient Egyptian Calligraphy : A Beginner's Guide to Writing Hieroglyphs, 4th ed., p. 34, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1999
- 7) Germer, R. : Flowers. Redford, D. B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol. 1. pp. 541-544, Oxford University Press, New York, 2001
- 8) Grandet, P.: Le Papyrus Harris I, Vol. 1, p. 251, Institut français d'archéologie orientale, Le Caire, 1994
- 9) Winlock, H. E. : Tutankhamun's Funeral, pp. 58-63, pp. 73-76, The Metropolitan Museum of Art, New York, 2010
- 10) Baum, N.: Arbres et arbustes de l'Égypte ancienne : La liste de la tombe thébaine d'Ineni (no 81), Département Oriëntalistiek, Leuven, 1988
- 11) Buhl, Marie-Louise : The Goddesses of the Egyptian Tree Cult, Journal of Near Eastern Studies, 6, pp. 80-97, 1947
- 12) David, A. : Hoopoes and Acacias : Decoding an Ancient Egyptian Funerary Scene, Journal of Near Eastern Studies, 73, pp. 235-252, 2014
- 13) Malek, J.: The Cat in Ancient Egypt, pp. 84-85, p. 87, British Museum Press, London, 1993
- 14) Germer, R.: Gardens. Redford, D. B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol. 2. pp. 3-5, Oxford University Press, New York, 2001
- 15) Kemp, Barry: The City of Akhenaten and Nefertiti : Amarna and Its People, Thames & Hudson, London, 2012